
マザコン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マザコン

【コード】

N5410N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

サリーは美人でスポーツ万能の少女。ところが無類のマザコンで。マザコンの女の子の恋愛のお話です。

第一章

マザコン

サリー「レイミーは外見は美人だ。それは間違いない。しかも性格もいい。明るく気さくな性格だ。」

そのうえ女子バスケットボールでハイスクールのレギュラーだ。成績も優秀ときた。何処に欠点があるのかわからない。黒く綺麗な髪をショートにして浅黒い肌をしている。しかし顔の彫は深い。アメリカならではの混血の顔であった。

背が高くすらりとした身体をいつも足の長さが目立つジーンズとシャツで覆っている。とにかくそこにいるだけで目立つ女の子であった。

そんな彼女だから言い寄る男は多かった。しかしであった。

「ちよつとね。マミーに相談してからね」

「えっ、マミー!?!」

「マミーって何だよ」

皆その言葉に思わず突っ込み返すのが常だった。

「マミーってよ」

「まさか」

「そうよ、マミーよ」

この場合のマミーは一つしかなかった。それはだ。

「私のね」

「お袋さんって」

「マジかよ」

そして皆呆れるのだった。これも常だった。

「ハイスクールに通っててか」

「それはないだろ」

「幾ら何でもな」

これで一気に冷めてだ。それで言い寄るのを止めた。実はサリー

は極端なマザコンでいつも母親べったりなのだ。何かあるといつも傍にいる。

教会でも外に出る時も家の中でもだ。父親そっちのけでいつも一緒にいる。それはまるで一心同体であった。そんな感じで一緒にいるのだ。

その彼女を見てだ。ハイスクールの男連中は残念な顔で言うのだ。つた。

「勿体ないよな」

「ああ」

「美人で性格もよくて成績優秀でおまけにスポーツ万能」

「凄い能力なのにな」

「それでもな」

まさにそれでもだった。誰もが無念の顔で言うのだった。

「マザコンっていうのはな」

「しかも何だよ。母猫と子猫みたいだしな」

「学校の登下校でも一緒だぜ」

その時まで一緒なのである。流石に学校の中ではそうではないがだ。

「あれじゃあ。ちよつとな」

「お袋さんとデートなんてな」

「ああ、絶対に駄目だ」

流石にそれでもいいという奴はいなかった。親子デートなど誰もしたりはしない。それをする位ならしない方がましというものである。

それでだ。彼等はさらに口々に言うのだった。

「あれだけの娘なのにな」

「参ったな、こういうトラップか？そういう事情があったなんてな」

「あれじゃあ。どうもな」

「ああ、無理だな」

こうして遂には彼女をそうしたことでも声をかける奴はいなくなっ

た。誰もが残念に思うがそれでもだった。マザコンには何も言えなかった。

そんな中でハイスクールにだ。転校生が来た。それは。

「よお、皆宜しくな」

「ああ」

「宜しくな」

いきなり気さくなやり取りだった。浅黒い肌に黒い目と縮れた髪である。彫はやや深くはつきりとした二重の目である。明らかにヒスパニックの顔であった。

その彼がだ。ここの名乗ってきたのだ。

「ハイメ」サントーナっていうんだ。宜しくな」

「ハイメっていつのか」

「ああ。メキシカンさ」

自分のルーツも言ってきた。明るい笑顔が実に印象的だ。

「メキシカン」アメリカンってやつさ」

「そうか、メキシカンか」

「そういえばそういう感じだな」

「どう見てもな」

「そうだろ？趣味はギターだぜ」

今度は趣味も言うのだった。

「それと野球な。サボテンも食うぜ」

「完全にメキシカンかよ」

「自分からどんだん言うな」

「あとスペイン語も話せるからな」

それもできるといふのだ。アメリカでは実際のところ英語だけでなくスペイン語もかなり話される。中にはスペイン語しか話せない者もいるのである。

第二章

「そっちが必要になったら言ってくれ」

「その時が来たらな」

「頼りにさせてもらうぜ」

「さて、じゃあ楽しくやるか」

こんな話をしてハイスクールに入ったハイメだった。彼はすぐに皆に受け入れられ明るい人気者として知られるようになった。その彼がだ。

ある日サリーを見てだ。こう言ったのだ。

「へえ、あの娘ってな」

「んっ、どうしたんだ？」

「何かあったのか？」

「綺麗な娘だよな」

彼女を見ながらの言葉だ。そのまま見てだ。

「あんな娘見たことないよ」

「惚れたか？」

「目に入ったか？」

「ああ、それならもうな」

結論は早かった。ハイメは迷わなかった。

そしてだ。その明るい笑顔で周りにこう宣言したのである。

「よし、決めたぜ」

「決めた？」

「何をだよ」

「あの娘ゲットするからな」

そうするというのである。

「絶対にな。ゲットするな」

「まさかサリーをか？」

「おい、マジかよ」

「あの娘をかよ」

しかしであった。彼の今の言葉を聞いた周りは一斉に怪訝な顔になってた。そのうえで彼に対して言ってきたのだ。今度は咎める顔になっている。

「止めとけ」

「いいか、絶対にだ」

「止めておけ、あの娘はな」

「んっ、何でだ？」

だがハイメはそんな彼等の言葉を聞いてた。まずは怪訝な顔で返したのだった。

「何かあるのか？ドラッグやってるとかレズビアンとかそんなのか？」

「ああ、そういうのじゃないさ」

「至って真面目な娘だよ」

「本当にな」

それは言われる。だがそれでも。

彼等は同時にハイメにこんなことも言ったのである。

「確かにそんなことはないさ」

「しかしな、それでもな」

「あの娘はまずいんだよ」

また言うのである。

「マザコンなんだよ」

「もういつも一緒にいてな」

「母親べったりなんだよ」

「マミーがいらないと何もできない」

とにかく重症のマザコンである。このことが言われるのだ。

「そういう娘だからな」

「諦める。っっていうかな」

「見なかったことにしろよ」

「おい、何だよそれって」

だがハイメはそれを聞いてだ。目を丸くさせて言い返した。

「そんなことで駄目なのかよ」

「おい、それが凄いだよ」

「もうな。本当に何でもかんでもマミーでな」

「どうしようもないんだよ」

「マミーが怖くて恋愛ができるかよ」

ハイメは周りに言われても強気だった。

「そんなことでよ、なるかよ」

「マジでそうするのか」

「本当に洒落にならないんだぞ」

「それでもいいのか？」

「だからそんなことで恋愛なんてできないだろ？」

あくまで陽気に言うハイメだった。能天気ですら見えるものだった。

そしてその明るさでだ。彼はまた言った。

「アメリカ人はどんな障害でも乗り越える」

「フロンティアスピリッツかよ」

「俺もアメリカ人だからな」

この辺りは複雑ではあった。メキシコは米墨戦争で国土のかなりの部分をアメリカに奪われそこにいたメキシコ人達は追われている。メキシコ系アメリカ人にとってはフロンティアは奪われた場所なのだ。しかし彼はここであえてこう言ったのである。

「やってやるぞ」

第三章

「やってやるさ」

「何も知らないから言えるんだよ」

「そんなことはな」

「なあ」

だが周りは口々にこうしたことを言う。

「あいな、本当に凄いんだからな」

「子猫が母猫にいつもまとわりつく感じだぞ」

「そんなのなんだぞ」

「子猫だって何時か親猫になるだろ」

しかしハイメは明るい笑顔で返すのだった。

「だからな。いいだろ」

「じゃあどうしても告白するんだな」

「それでゲットするんだな」

「世の中は何でもチャレンジだろ」

またアメリカ人らしいことを言うのだった。

「そうだろ？アメリカ人だったらな」

「まあ精々頑張れ」

「何があっても知らないからな」

「何があるかわからないからいいんだよ」

相変わらずの言葉である。

「そうだろ？世の中ってのはな」

「御前本当に楽観的だな」

「っていうかそれは有り得ないだろ」

「なあ」

周りはそんな彼に呆れるばかりだった。

「しかしそれでも若しあいつをゲットできたらな」

「その時はパーティー開いてやるからな」

「おっ、いいなそれ」

パーティーと聞いてだった。ハイメはまた笑顔になるのだった。笑顔の絶えない男なのは間違いない。性格に暗いものは見当たらないように見える。

「じゃあ用意しておいてくれよ、パーティーのな」

「ゲットできたらだぞ」

「その時にだぞ」

「いいな、それは」

「ああ、わかってるさ」

笑顔はそのままである。

「それじゃあな」

「わかってるのかな」

「わかってないだろ」

「どう見てもな」

周囲はそんな彼を見てこう言うばかりだった。

「まあ玉砕しても何度でもアタックするみたいだしな」

「ダメージは受けるなよ」

「ふられてもな」

「ふられる？そんな選択肢は最初からないさ」

そう言われても平気なハイメだった。

「じゃあ行つて来るな」

「さて、どうなるかな」

「俺達も上手くいくことを祈ってるけれどな」

かくしてハイメはサリーにアタックするのだった。彼の行動は迅速かつ直線的だった。

まずサリーのところに来てだ。こう言うのである。

「映画館のチケット二枚あるんだ」

「二枚？」

「ああ。一緒に行かないか？」

こう言うのである。オーソドックスではある。

「一緒にさ。どうだい？」

「ちよつと待って」

しかしであった。サリーはここで携帯を取り出した。そのうえでこう彼に対して言うのである。

「マミーに相談するから」

「相談って？」

「メールで聞いてみるから」

そうするというのである。

「ちよつと待ってね」

「ああ、そうしなくても大丈夫だよ」

「えっ、どうして？」

「一緒に行くのが俺だからだよ」

だからだというのである。

「それはだ。気にしなくていいよ」

「気にしなくていいって」

「次の休み一緒に行こう」

また言うハイメだった。

「それでいいよね」

「あっ、待って」

しかしであった。サリーはまた携帯を持っていた。そうして言うのである。

第四章

「マミーに聞いてみるから」

「ああ、次の休みは絶対に大丈夫だから」

「今度はどうしてなの？」

「だって俺が大丈夫だって言ってるからだよ」

明るい笑顔での言葉だ。白い歯が光ってさえいる。論理性も何もあつたものではないがそれでもだ。彼は自信に満ちた声で言うのである。

「だから大丈夫なんだよ」

「そうなの？」

「疑うの？」

「ちよつと待つて」

またしても携帯だった。今でもう二度目である。

「マミーに聞いてみるから」

「それも安心していいよ」

「いいの」

「どうしても俺を信用できないのならさ」

「ええ」

「今この場でドカンとやっていいから」

「こつ言つてみせたのである。」

「ピストルでもライフルでも何でもいいからさ」

「殺人罪に問われるけれど」

「死体は森の中にも埋めていいから」

「森の中って」

「そうしたらわからないからさ」

これはジョークであるがあまりいいジョークではなかった。アメリカでは行方不明者が年間百万人出ると言われている。その中の幾らかは殺されて死体を始末されているからではないかという説もある。

るのである。物騒な話である。

「それでね。どう?」

「それは」

「それもマミーに相談する?」

「にこりと笑って問うのだった。」

「それはどうなの?」

「いえ、それは」

流石にそうした相談はできなかった。母親に対してもだ。さしものサリーでもだ。

そうしてであった。彼女も遂に言うのだった。

「それじゃあ」

「いいんだね、それで」

「今度の休みよね」

サリーの表情は少し観念したようなものになっていた。そうした顔での言葉だった。

「その時よね」

「そうだよ、映画館にね」

「映画館でデートね」

「また言うサリーだった。」

「わかったわ。じゃあ」

「うん、それじゃあね」

こうして話は決まった。二人は次の休みに一緒にデートをするこ
とになった。細かい場所もやることも全て決めてだ。そうして行く
のであった。

待ち合わせ場所の駅前に行くのだ。サリーはまた携帯を見ていた。
それを見ながらそのうえで彼のところにやって来たのである。

その彼女のところに来て尋ねるとだ。こう答えるのだった。

「ちよっと。これからのことをね」

「相談してたとか?」

「マミーにね」

まさにそうだといいのだ。つまりメールで相談しているのだ。

「ちよつと」

「それで何て？」

「まだ返信来てないの」

困った顔での言葉だった。

「それが」

「じゃあいいじゃない。それじゃあ行こうよ」

「いいって」

「行こう」

また言う彼だった。

「それは置いておいてさ」

「えっ、けれど」

「いつもでなくていいじゃない」

ハイメは明るい顔でサリーに告げた。

第五章

「それでね。いいじゃない」

「いつもでなくていいって」

「だっていつも一緒にいなくちゃいけないって訳でもないんだろう？」

「えっ、けれど」

サリーはそう言われるとだ。困った顔での返答だった。

「マミーは」

「だから。学校じゃマミーと一緒にじゃないじゃない」

「それはそうだけれど」

「じゃあそれでいいじゃない」

また言う彼だった。

「それでさ。学校と同じだって思えばね」

「学校と同じ」

「そう、同じだよ」

また言うのだった。その時と同じなのだという。そして言葉はそれで終わりではなかった。

「それにさ」

「それに？」

「本当に時々ね。マミーのことを忘れてみたら？」

「忘れるって」

「そう、忘れて楽しく遊ぼうよ」

楽天的で賑やかな彼らしい言葉だった。彼は実際にそう考えていたしそれを行動にも出していた。それでサリーの前にいるのである。

「たまにはね」

「たまにはって」

「その方が楽しくやれるよ。ハメを外すのもいいものだよ」

また言うのだった。

「それでね。やっていくのもね」

「そうなの」

「とにかく行こう、それで楽しくやろう」

「ええ」

サリーも小さくだが頷いた。そうしてだった。

二人でデートをする。サリーは最後まで携帯を出さなかった。

そして最後の別れの場所は駅前だった。そこでサリーはハイメにこう言ってきたのである。

「あの」

「あの？」

「今日、楽しかったわ」

小さな声での言葉だった。

「今日はね。嬉しかったわ」

「嬉しかったの」

「はじめてのデートだったけれど」

「ファーストデートだったんだ」

「ずっと憧れてもいたけれどね」

このことも言う。やはり小さな声ではあるがだ。背が高く姿勢のいい彼女だがそれでも今は背中を少し丸めさせている。それがハイメには何故か可愛く見えた。

「それでも」

「それでも？」

「楽しかったわ。有り難う」

「御礼なんていいよ」

今のサリーの言葉には軽く笑って返すハイメだった。

「そんなことはさ」

「そうなの」

「そうさ、いいって」

そのことをまた言うのだった。

「別にな」

「そうなの。それでも」

サリーはまだ言う。声は相変わらず小さく少しづつ出されるものだった。その声でハイメに対して語っているのである。そうしているのである。

第六章

「マミーに一度も連絡しなかったけれど」

「そうだね、確かにね」

ハイメもそれは見ていた。しっかりとだ。

「一度もね」

「何かそれでもやっていけたわ」

しっかりとした顔での言葉だった。

「不思議だけれど」

「不思議じゃないよ」

だがハイメは笑ってこう返すのだった。

「それはね。不思議じゃないよ」

「不思議じゃないの」

「だってさ。サリーはサリーじゃない」

「私は私」

「そう、サリーはサリーなんだからさ」

これが今のサリーへの言葉だった。

「マミーとは別なんだし」

「マミーとは」

「確かにマミーが好きなのはわかるよ」

それはだというのである。

「それでもサリーはサリーなんだよ」

「私は私だから。だから」

「少しマミーと離れてね。そうしていくといいと思うよ」

「そうなの。だったら」

サリーはハイメの言葉を聞いてだ。小さく頷いた。そしてそのうえで言うのだった。

「少しだけでも」

「うん、離れてみるのもいいよ」

「わかったわ」

その言葉に頷いてだ。そうしてだった。

サリーは少しだけ母親と離れてみた。だがそれで何かまずいことが起こったということもなかった。相変わらず絆は強いものであるがそれでもだ。

少なくともマザゴンと言われる程のものではなくなった。皆その彼女を見てそのうえでハイメに対して言うのであった。

「また変わったな」

「そうだよな。御前また凄いことやったな」

「よくやれたよ。何やったんだよ」

「少し離れるだけでいいって言ったただだよ」

それだけだというのだ。実際そうしただけであるから嘘ではない。

「それだけだよ」

「そうか、それだけか」

「何かそれだけでああなるんだな」

「だってさ。少し離れてもどうということはないしね」

ハイメはそれも言うのだった。

「絆はそのまま残るんだし」

「絆？」

「絆はかよ」

「そうだよ、残るよ」

また言うハイメだった。

「親子の絆なんて滅多なことで弱まったりしないものだからね。少し離れてもね」

「成程、あいつもそれに気付いたってことか？」

「そういうことか？」

「簡単に言えばそうだよ。親とずっと一緒じゃなくてもいいんだよ。これがハイメの考えである。」

「少し離れてもどうってことはないよ。それに気付いたらもうマザゴンじゃないんだよ」

最後にこう言ってそのサリーのところに向かうのだった。そしてまたデートの約束をするのだった。もうその時には携帯を出すことはないサリーだった。

マザコン 完

2010・5・3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5410n/>

マザコン

2010年10月8日14時03分発行